嵐山×出会い×BBQ

～笑いが集まる嵐山町にて～

著者：岩崎　寛

嵐山町でのある日の散歩

私は埼玉にある嵐山町へ出かけた。
気の向くままに出歩くことが趣味になっていたので、
この日も何の気なしに散歩を楽しんでいた。

嵐山町を知らない人もいると思うので、簡単に説明しておきたい。

嵐山町は↑の地図でもわかるように、埼玉県の中央に在る。
この町には、武蔵嵐山という名前の場所がある。
その由来は京都にある嵐山であり、
京都の嵐山と似ていることから武蔵嵐山という名前になったようだ。
また、この町はバーベキューも有名で、動画などで宣伝がされている。

嵐山町は自然豊かな町で、散歩などには最高の環境だと私は思う。
だから、という訳ではないが私は何度かこの町を訪れている。
考え事をしたいときや、逆に何も考えたくないときなど、
気の向くままに自然を見ながら時間の流れを感じる。
そんな時間が私にとっては幸せである。

　唐突に周りの空気が変わった。
背後から殺気のこもった空気が重くのしかかってくるのだ。
どれくらいの時間が経っただろうか。未だに消えない緊迫感に痺れを切らした
私は、意を決して振り返った。
すると、そこには武士の格好をした男が立っていた。

私はこのとき不覚にも笑ってしまった。
なぜならば、現代において武士などいるはずが無いのだ。
ましてや刀などを振り回す人間などなかなか見ることができない。
何かの悪戯かドッキリに違いないと思い、辺りを見回していると、
男のほうから話しかけてきた。

「わしの名は畠山重忠と申す。
　少しばかり意識が無くなり気がついたら周りが変わっておっての。
　此処は鬼鎮神社のようじゃが・・・・・・。」

この武士の格好をした男は平然と歴史上の人物の名前を名乗ってきた。
返答に困っている私をよそに、畠山と名乗る男は腹が減ったとか言ってきた。
話を聞く限りでは、この男は悪い奴ではなさそうなので
食事へと連れて行くことにした。

散歩などをしているとよくある話だが、
行き先と目的が同じ人は、気軽に仲良くなれる
なんて事がある。
その日も幸か不幸か二人の女の子と仲良くなり、
一緒にバーベキューをすることになった。
意外なことに、畠山は女の子たちと打ち解けているようで、なかなか楽しい食事の時間を過ごすことができた。

「うむ、気に入った。わしの家に招待しよう」
気分を良くした畠山が唐突に発した言葉に、
私は一抹の不安を感じた。
ドッキリや悪戯にしては、言動がそれっぽくない。
……というより、明らかに現代の知識がないのだ。
高そうなものを身に着けている割には、紙幣という概念がないようだし
持ち物を見ても、よくわからないものばかりである。

・・・・・・やはり不安は的中したようだ。
畠山が自分の家だと招待した場所は史跡博物館であった。
彼は「自宅」の前で呆然と立ち尽くしていた無理もない。意気揚々と向かった先には見慣れた家ではなく博物館がただ建っているだけなのだ。
そんな彼を尻目に、女の子たちは中にある展示物に興味を示しているようだ。

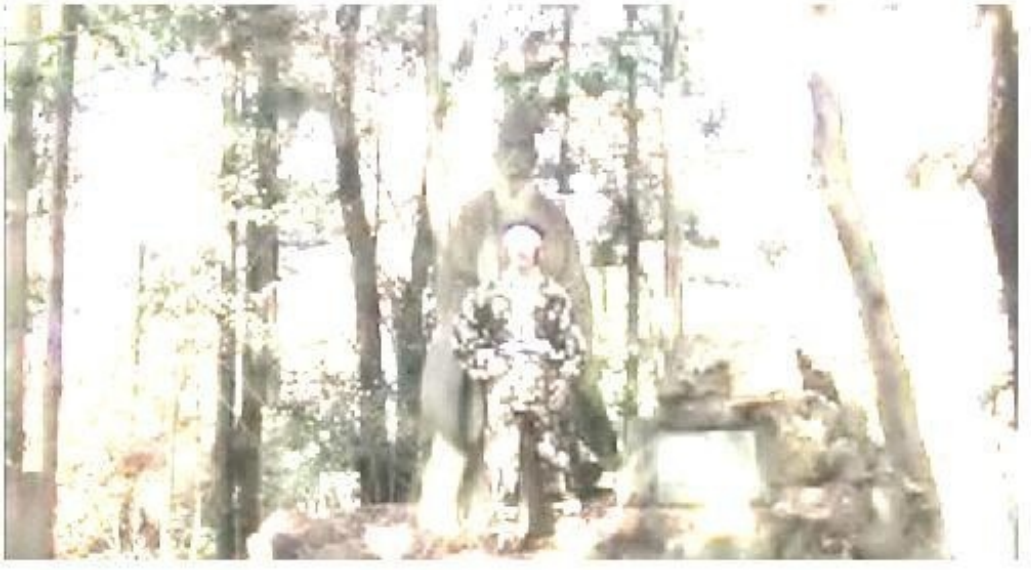
不安そうに中を徘徊していると、
彼は人形の前で動きを止めた。
甲冑姿の人形を敵と勘違いしてしまっているようである。
女の子たちは、歴史に詳しいようで、その人形が畠山重忠のものであると彼に告げた。
自分が過去の人間であると知った畠山の抱いたショックは大きかっただろう。

　畠山は、重い足を引きずりながら史跡博物館を後にした。
博物館の前で彼は何度も建物を見返していたが、自分の家ではないことを唯々確認するだけの結果になってしまった。

私は何も声をかけられず、ただ後ろから見守るしかできなかった。

　彼は畠山の像が祭られている場所へとやってきた。
食事のときの雰囲気とは対照的で、全てのものから拒絶されているような後姿が印象的だった。この世界から今にも消えてしまいそうで、しかし、
かける言葉を見つけられない私は、彼を肯定することはできないでいる。彼は自分の像の前で物思いに耽っている。もはや、彼を肯定するものは歴史しかないのである。畠山という存在でいなければならないからこそ彼は否定され続けているのである。なら、彼が畠山で無くなれば‥‥‥。意味の無い自問自答を繰り返し、彼に話しかけようとした瞬間、何かを思いついたかのように彼は手をたたいた。表情は使命感を帯びているような顔つきになり、つい先ほどの雰囲気とはまったく違うものになっていた。私は、彼がどのような考えにたどり着いたのか素直に聞いてみると、
「あ、戦の途中じゃった！」
と、彼はいった。
‥‥‥。
私は言葉を失った。戦の最中からタイムスリップして現代にやってきた彼が、この時代でやったことといえば、食事とウォーキングくらいなものであった。それ以前に、戦の途中といわれても、私の人生でその問いに対する解答を習ったことが無い。

「おぬしには、世話になったな。では、わしは戦場に戻る。」
彼は、口早にそのような事を言い、畠山像の前へ立った。



まるで、畠山像の真後ろに太陽があるように周りに光があふれ出した。
あまりのまぶしさに目を開けることができなかった。
その光は次第に弱まっていった。
目を開けるとそこには畠山重忠像だけが佇んでいた。

後に嵐山町の方から聞いた話だが、
この公像の前にはよく霊が出るのだそうだ。
私が実際あった畠山重忠は、霊だったのだろうか。
しかし、たとえ霊であったとしても彼と歩いた嵐山町は
とても新鮮で、歴史との出会いに恵まれたものであった。

もしかしたら、嵐山町からの贈り物だったのかもしれない。

嵐山×BBQ
困ったときはバーベマンへ

肉
BBQ

皆様こんにちは。前回の話でも書きましたが、拙者は散歩が大好きで、特に嵐山町での散歩が好きでござる。
・・・・・・前回の畠山さんの話し方が移ってしまいました。
気を取り直して、嵐山町では畠山さんなどの歴史のほかに、
BBQが有名だそうです。
自然豊かな場所でのBBQは非常に気持ちも良いですし、心が弾みますよね。
しかも、嵐山町では、手ぶらでBBQ場に行ってもBBQを楽しめるというシステムがあるようです。都内からも電車ですぐなので、
散歩がてら利用しているのですが、実は、
嵐山渓谷バーベキュー場にはある秘密があるそうです。
なんと、バーベキュー場を守るために戦う「バーベマン」という
ヒーローがいるらしいのです。ヒーローがいるということは、
当然悪者もいるようなのですが、このバーベマンの意外なところは「悪者」がいるからヒーローなのではなく、
困ったことがあったら助けてくれるからヒーローなのだとか・・・・・・。
バーベマンについては、後ほど体験談で話していきたいと思います。
というわけ、で早速体験談のほうに移りたいと思います。

（地図）

私はこの日、嵐山町のアイドルユニット「Pieace」（ピース）のプロモーション撮影に嵐山渓谷バーベキュー場へとやってきた。渓谷というだけあり、川のせせらぎや、鳥のさえずりなど清清しい環境であった。
いい作品が撮れるぞ！なんて、高揚した感情を無邪気に表に出してしまっていたようで、撮影準備をしている仲間にからかわれてしまった。
準備も終わり、いよいよ撮影がスタートした。始めは表情の硬かったピースの子達も、解放的な環境のおかげか徐々に自然体になってきた。

無事午前中の撮影が終わり、昼食の時間になった。
撮影をバーベキュー場で行っているので、当然BBQをすることになった。
せっかくなので、ピースの皆に BBQ をしてもらい、その姿もプロモーションに活かそうした。ピースに話してみると、笑顔で引き受けてくれた。アットホームな雰囲気で皆楽しく作業をしていたが、なかなか火が点かないようだ。アイドルらしく、

「火が点かな～い」

と、かわいらしく言っている姿が印象的だった。撮影の時間が押してはいけないので、火を点けに行こうとした。しかし、私たちより先にピースのものへたどり着いたのは、全身赤い色の服を着た良くわからない奴だった。
私たちが唖然としていると、ピースは平然とその男に火が点かなくて困っていることを伝えた。すると、男は自身満々に
「任せろ！！」
というと、彼は何も持たずにその場にしゃがみこんだ。

徐に両手を目の前へ突き出し、数秒静止した。
それと同時に、ピースが後ろから彼に向かって応援をはじめた。
すると、彼の手から火が出てきたのである。

私は彼の行動にすごく興味を持った。
困っている人のところへ颯爽と現れ、問題をかっこよく解決する姿は
まさに正義のヒーローではないか。
ピースに彼のことを尋ねると、
彼はバーベキュー場を守るバーベマンというらしい。
火が点かないときや、強風でごみが飛ばされてしまったときなど
些細なことでも助けてくれるそうだ。
また、バーベキュー場には、「肉よこせ団」という悪者がいて、BBQ を楽しんでいる人を脅し、肉を奪っているそうだ。悪戯にしては、悪質なものだ。そんな連中にあったら、私が懲らしめてやるのに・・・・・・。

バーベマンも混じり、BBQを楽しんでいたのだが、バーベマンは誰かが困っていると言って、どこかに行ってしまった。
すると、タイミングを計っていたかのように後ろから何者かが襲ってきた。
先ほどの会話に出てきた肉よこせ団のようだ。
ピースの子達は泣きながら逃げ出した。私は目の前で起こっていることを唯呆然と見届けることしかできなかった。

肉よこせ団が突如動きを止めた。肉よこせ団は視線をある方向へ向けたまま釘付けになっていた。私もつられて同じほうを見ると、そこにはバーベマンの姿があった。
沈黙は簡単に消し飛んだ。
バーベマンは勢いよく走りだし、肉よこせ団に鋭いけりをお見舞いした。
まるで、ヒーローショーのような機敏な動きのバーベマンが軽々と肉よこせ団を退治していった。しかし、バーベマンの不意を衝いた肉よこせ団の攻撃に、彼はついに倒れてしまった。もうだめかと思ったときに、周りからバーベマンを応援する人たちが集まっていた。彼は、皆の声援に後押しされるようにゆっくりと立ち上がり、火を点けた時の様に腕を前に突き出した。すると、彼の手から光線が射出され、最後の肉よこせ団も退治してしまった。

＊

午後の撮影も無事終わり、撤収作業をしていたときのことである。
バーベマンが、是非 BBQ に来る人に伝えたいことがあるというので、私はそのシーンをカメラに収めた。
彼は
「ゴミは持ち帰ってね」
と、お茶目に一言いい、大きなジェスチャーを行った。

バーベマンに出会い、バーベキュー場はそこにいる皆と作り上げていく場所だと教わったような気がする。
BBQ を楽しみにしている皆のために
今日もバーベマンは見守っている。

あとがき

はじめまして。この本を書いた岩崎と申します。この本は、嵐山町のプロモーションビデオを作成するに当たり、絵コンテを作るうえで作り出したシナリオを文章にアレンジしたものに当たります。1本の動画を作るということで、キーワードになるものが多々あると思いますが、私が今作品のキーワードに上げたものが、「嵐山・出会い・BBQ」です。

嵐山町は自然が多く、心地のいい雰囲気で私を迎えてくれました。嵐山そのものとの出会いが、嵐山町とかかわるプロジェクトにおいて終始忘れることのできなかった感情です。そして、嵐山＝BBQという言葉がしっくり来るほど、嵐山町では BBQ を堪能させていただきました。嵐山渓谷では、多くの家族や若いグループが BBQ を楽しんでいて、ただその場にいるだけで心躍る雰囲気になっていました。都内や関東圏にいる方々は、是非尋ねてみてはいかがでしょうか。

動画での表現では、音などの効果が強い分、ストーリーがあいまいになってしまったり、考えてもらうことに意味を持たせたりしてしまいますが、改めて文章に起こしてみると、動画とは違った面白さを実感することができました。

もしよろしければ、この本で扱われたエピソードの動画が掲載されている HP を閲覧してみてはいかがでしょうか。
ここで扱われていないストーリーや、バーベキューのレクチャーなど面白い動画も多々あるので、是非参考にしてみてはいかがでしょうか。
http://55bbq.com/